



東京大学
文科三類
現役合格

滑川 翔太

クラス授業受講科目：数学・現代文・日本史
55段階受講科目：英語・数学・古文・漢文

四谷学院は先生との距離が近い。 質問が得意でなくても自然と話せた。

栗山：滑川君は四谷学院には高1から通ってたんだよね。何かきっかけがあったのかな？

滑川：中高一貫校に入って高校受験をしなかったの、そろそろ勉強習慣をつけないと、というくらいの気持ちでした。あと英数の成績が、中3のときは良かったけど高1でちょっと落ちて。四谷学院の55段階なら、適度な分量から始められるかなと思って、英語と数学を受講しました。

栗山：55段階は、受けてみてどうでしたか？

滑川：先生との距離が近い。僕は先生に質問するのが得意じゃないので、先生との距離が近いと質問しやすいのが助かりました。あと、数学に関していうと、高校の授業の復習も兼ねて進めることができて、それまであまり復習しない人だったので、習慣ができたのが良かったです。

栗山：それで、高3から数学と現代文で東大選

抜クラスに入ったと。受けてみてどんな感じでしたか。

滑川：55段階と同様、先生との距離がすごく近くて。授業の中で答案の作り方を教えていただいたのが、すごくわかりやすくてためになりました。特に現代文は、本当に解答の作り方が全然わからない状態だったんです。問題演習量が少なかったっていうのもあると思うんですが、それまでは「根拠を持って解答をつくる」ということを意識していなかったのが、この授業から意識できるようになりました。

栗山：数学に関してはどうですか。

滑川：答案を作るにあたってすごく細かいところまで指導していただけた。最初のうちは手取り足取りという感じからのスタートでしたが、ある程度書けるようになってからも、細かい、行間を埋める必要性みたいなことを指導されて、それはすごく勉強になりました。

栗山：数学の答案の書き方を理解できていない

人は、学力の高い人にもたくさんいるんですよね。僕も授業の中で「主語をはっきりさせなさい」とか「接続詞を入れなさい」とか言うんです。滑川：そうですね。そういったことを言われました。

栗山：一つの等式が独立してあったとして、その等式はワン・センテンスなんです。X=Yなら、「XとYは等しい」というセンテンス。で、式が並んだときに、「XとYが等しいならば、○○」なのか「XとYが等しいので、○○」なのか、それが条件なのか、そうであると主張しているのか、読み手に伝わるように答案を作らなければいけない。でも、ほとんどの生徒はそれが意識にないんですよね。数学の答案というのは数式の羅列ではダメであって、全体として一つの記事として完成していなければいけないんです。

記述問題の答案の完成度は、 プロに見てもらわなければ上がらない。

栗山：英語はクラス授業ではなくて、55段階の中で対策したんですね。東大対策として55段階はどういった点に効果がありましたか？

滑川：自分の答案を客観的に判定してもらえたことです。解答とつき合わせただけでは、答案がどのくらいの完成度かわからない。特に自由英作文なんかは、先生に見てもらわうしかないなと思います。

問題が解けない原因は 大抵基礎の抜けにある。 難問ばかり解くのは効率が悪い。

栗山：滑川君が東大に現役合格できた要因は何だと思いますか。

滑川：演習をたくさん積むことができたのと、基礎を固められたことです。

栗山：基礎が固まっていることの大事さというのは、どういうところに現れましたか。

滑川：特に日本史で実感したんですが、記述答案を作るにおいて、基礎の部分がわかっていないとまったく手が出せない。数学でも模試で解けなかった問題を見直して、できなかったのは基礎がわかっていなかったからだ、ということが結構あって。

栗山：「東大だから、難しい問題が解けなくちゃいけない、だから難問が集まっている問題集を解こう」みたいな考え方をしがちなだけけど、結局のところ、基礎をおろそかにした勉強って、効率が悪いんですよ。

滑川：基礎がわかっていないから解けない、ということを経験したタイミングで実感しました。

不安なとき支えてくれる人がいて 最後まで信じられた。

栗山：東大を目指す後輩に向けて、何かアドバイスを。

滑川：「最後まで信じる」ですかね。僕自身、ちゃんとした自信があったわけではなくむしろ悲観的なので、返却された模試を見て不安になったり。そういうときに、四谷学院の担任の先生にほめられたりして、そういうことで自信を取り戻すことが結構あったかなと思います。

栗山：入試に向けた一年間、メンタル面ってすごく大事ですからね。今日はありがとうございました。

